

私は日本語がわからない（5）

中 村 平 治*

最近、新聞紙に目を通して気づきました。読者の欄という面があり、そこに投書者の年齢が括弧付きで全て明示されています。読者からの感想とか意見が「声」という枠組みで紹介されているのですが、なぜ、どの場合も数字を明示する必要があるのか、私にはわかりません。声の発信者の名前を明記することは、責任の所在として、必要でしょう。また簡単な要約を示すことも前触れとして有効でしょう。それから筆者の役職名とか所属機関名を付記することも論旨の方向づけになるので重要でしょう。

しかし、論旨を展開するのに、なぜ、年齢を明記する必要があるのか、私には、ふにおちません。年齢は発信者の姓名・論旨・役職などと一心同体の間柄にあるからなのでしょう。私は、年齢はこれらの前触れとはまったく関係ないので、明示する必要はないと思います。

本論では、年齢がいかにかやすく日本語の中に仕舞い込まれているか、なぜそうなのかを解き明かしてみたいと思います。

* * * * *

議論の資料として、今手元に某新聞社の「声」という欄の切り抜きを数枚用

* 福岡大学人文学部教授

意しています。それから日本語のありようを別の角度から観察するために英字新聞の対応欄も揃えています。当欄の主旨はメッセージの内容・論旨にあります。ここで目を付けるのは、前置きの一部である年齢のデジタル化です。論旨の前触れとして、要約・姓名・役職を設定するのは必要でしょう、しかし年齢と居住地名を明示するのは無意味だと私は思います。ここでは特に年齢を付記することの無意味・無関係さを説きたい。なぜ、日本語では、他の欄も含めて、年齢の明示化にこだわるのかを考えてみたいのです。

後先になります。私は、年齢の付記は、文脈と関係が無い場合、臨機応変にカットすべきだと主張します。歳不要論をこれから繰り広げようというわけですが、まず、個人的な言語感覚から入ります。

* * * * *

私は、率直に言って、自身の年齢を公表することに躊躇いを感じます。定年間近であるし、早く止めんかと急ぎ立てられるような気持ちになるからです。私が威勢のいい40歳代であれば、公言するのになんら躊躇いを感じないでしょうが、老いぼれでは恥さらしになるだけだからです。

実は、愚妻も私より年長のため歳を公示するのがイヤだと、特に宿六と連記するとき戸惑いがあるとこぼしています。更に、娘も30を越えて独身だった頃、歳を問われるのが苦痛だったと嘆いていました。

ですから、私の家族はこぞって年齢明示化反対になります。そのようなわけで、「声」の欄に投書したくても、問題の数字を明示しなければならないかと思うと、首を引っ込めざるをえなくなります。

歳に対する嫌悪感とは別におくとして、日本人は、一般的には、年齢による位置づけ、話題にすることに快感を覚えるのではないのでしょうか。特にお年寄りに対して、ためらうことなく年齢を尋ねるし、また、喜んで答えてもらえる

いう風潮にあります。テレビなどでも、アナウンサーがにこにこ微笑みながら「おじいちゃん、おいくつになられましたか」と質問します。これに対して、潔く「90になります」と答えています。日本語で年齢を問うことは、一般に友好的な挨拶とみられます。「こんにちわ」「おでかけでか」「どちらへ」「精が出ますね」「いいお天気ですね」などと同類の呼びかけだとみなされます。

私は以前女子学生に、年齢を尋ねられて、不愉快にならないかと問いかけてみましたが、大多数のものが、首を横に振っていました。20歳前後ぐらいまでは、自分はまだ若いんだという自負心が旺盛なのでしょう。

日本人が年齢を厚遇するのは、社会的に「年功序列」が尊重される点にも認められます。年令が一年一年増すごとに、慶賀とみなされ、地位も俸給も上昇していく仕組みになっています。このような風潮にあるとき、「おいくつになられましたか」という話題は対話に活を入れる呼びかけになります。

更に、日本語が敬語を大切に頻用するのも、年長者に対する畏敬の念が背後に控えているからだと思われます。初対面の人と話をするとき、日本人は、まず、相手が目上か、目下かと値踏みします。これが判明しないと言葉の位置づけが、つまり尊敬語を使っていいのか、ぞんざい語でいいのかが不明になるからです。

何歳かの話題は、評価されるときだけでなく、白眼視されるときも日本語では取りあげられます。いずれにしろ話題を賑わすことには変わりありません。例えば「年頃の」「娘盛りの」「番茶も出花の」などは年令を評価する形容詞群で、「婚期を逸した」「年増の」「行き遅れの」「クリスマスケーキの」（12月25日「歳」を過ぎると安売りになるので）などは年令を蔑視する形容詞群です。

いずれも、日本語独特の年令言及の表現化だとみられます。

* * * * *

ここで上の日本語の年齢との係わり具合を、英語の観点から覗いてみます。対応の「声」欄は英語では Letters to the editor と言います。前触れがだいぶ違ってきます。共通するのは、名前と住所名と要約だけです。所名は簡潔で同姓同名を避けるために付されるに過ぎません。英字新聞には、年齢・役職名・所属機関名などが一切見当たりません。ここで注目するのは、日本語で義務的に付される「年齢」が英語ではカットされるという点です。英語で切り取られるのは、これが論旨と関係がないからです。

それから日常的な挨拶として、日本語ではお年よりに歳の数を気安く尋ねますが、この習慣も英語にはありません。How old are you? なんていう問いかけは、警察の尋問するときに限られるでしょう。普通は失礼になるから、避けられます。

日本語には年齢を尊重する敬語が豊富にありますが、英語には年齢を重視しないため敬語がありません。日本語では「おいでになる」「参る」「来る」などと使い分けますが、英語では come だけで済みます。この複雑化は年齢を重視する敬語が、そして単純化は年齢に拘わらない認識が底流しているからと考えられます。

敬語の他に、日本語の形容詞も年齢を強く意識させます。しかし英語の形容詞はそうではありません。この意識の違いは、「年頃の」と of marriageable age を比較してみると、明らかになります。前者はその時代、時代の具体的な歳の数を連想させますが、後者は個人差があり、固定した歳の数を意識させません。日本語は年齢と結婚が結びついています。英語はそうではありません。

「彼女は婚期を逸した」の例も、固定した年齢を越えたことを連想させますが、対応の英語 She has lost any chance of marriage. は年齢が原因で破談になることを特に意識させません。

更に「行き遅れ」「売れ残り」「行かず後家」なども、結婚すべき一定の年齢を越えたことを蔑視的に言いかえたものですが、この概念を忠実に捕えた対応

表現は英語にはありません。英語には年齢と結婚しないことは直接的に結びつかないからです。と言うより、もし結びつくと、プライバシーの侵害になり、当の娘さんに対して失礼になるからです。

もう一点、私が年齢を公示することに個人的な嫌悪感がある旨を前述しましたが、英語国民は倍加的に毛嫌います。私はかつて或る婦人がご主人の健康状態に触れていたの、つい How old is he? と質したところ、目瞼に皺を寄せられ、黙殺されたことがありました。私はそのとき、婦人が日本人であれば、それほど嫌悪感を抱かれなかったであろうと思いました。

英語国民は、特にご年配の方達は、年齢を気にしています。いつまでも、若くしようと念じています。彼らにとって It's great to be young. だからです。彼らが 80 を越しても真赤な服装を好むのもその現れでしょう。こういった好みがあるから、これに竿をさすような年齢の質問に対して嫌悪感を示すのだと見られます。歳への排斥感があるから、年齢の話題も取りあげないのだと思われます。

* * * * *

以上、固有名詞の括弧付きの「年齢」撤廃論を3つの観点、即ち個人的な嫌悪感・日本語独特の年齢偏向・英語の年齢忌避感、から説いてきました。以下、視座を一段高いところから通覧し、まとめとしよう。なお読み取り易いように「山川一郎」と仮名を設定します。資料も「声」の欄を越えます。

(1) 人物の紹介記事に「中学3年山川一郎(14)は・・・」とありますが、この括弧付きの数字は余計です。先行の「3年」で自明だからです。また後続の内容からも無縁の情報だからです。当数字は一連の情報伝達から浮かび上がっています。伝達は関係のあるものだけを簡潔に叙するのが、本筋です。

同じことは写真付きの記事についても言えます。写真で何歳ぐらいか判断がつくからです。写真と「中学3年」とが同じような情報を伝えるのであれば、問題の年齢付記は関係のないものになるからです。余計な情報はカットするに限ります。

(2) 年齢が付記されるのは初めて目にする、いわゆる無名の人であって、すでに名が知られている人ではありません。有名人は日本語でも省かれます。これは普遍的に自明のことだからです。しかし日本語では年齢付記の認識が濃厚なので、少しでも知られていないのではないかと心配されるときは、明示されます。「松井秀選手」に対して「山川(27)選手」と言った具合にです。これでは名前の浸透度を区別することになり心配です。差別になるくらいであれば、いっそのことどちらの場合も省いてしまう方がいいのではと考えられます。

(3) 上で論旨の内容と無縁の年齢はカットする方がすっきりする旨、説きましたが、このことを実例で証明してみましょう。次に挙げる前置きの要約は、括弧内の歳の数とは関係があるでしょうか、ないでしょうか。関係がないことは、数字を隠して、何歳ぐらいの人の意見であるのかを言い当ててみるということです。言い当てが不特定だと、その分だけ、無関係ということになりませんか。

「限りなく暑いイワクニの夏・・・(52)」

「児童の登校を守る人に感謝・・・(35)」

「我が庭の木にクワガタすむ・・・(64)」

「訓辞の言葉が首相に重なる・・・(71)」

(4) 年齢を公示するのが本人にとって不都合になる症例を挙げます。次の括弧付の紹介の仕方がそうです。「教授」として面白くない、不快感を醸し出

す数字ではないでしょうか。この不都合は「63」でなく「43」に代えてみると明らかになります。前者だと世間一般の人々にとって、厚遇の天下りの悪印象を与えるのではないのでしょうか。後者だと、そういったやっかみの印象は特に与えません。したがって、「教授」の人事異動を高く評価するのであれば、本人にとって省いて欲しい高数字になります。

印象の好悪によって年齢の付記が望ましくなったり、嫌悪されたりするようであれば、この場合も判断にユレが生じるということで、上の(2)と同様、どちらの場合も省いてしまう方がすっきりするでしょう。

「福岡太郎(仮名)東大卒、67年司法修習生。法務省刑事局長、最高検次などを経、05年4月から同志社法科大学院教授。63歳」

(5) これまで論旨と年齢が関係ないため、省いてもなんら差し支えないと説いてきました。実例によって関係がないことを示しました。このことは、逆に言うと、関係があるなら、付記するのが望ましいということになります。関係があることを示す人物紹介に職業捜しの欄があります。50代までの方とか18歳から23歳までの方といった広告が散見されますが、この年齢の付記の仕方は当然視されるでしょう。労働力と年齢は大いに関係ありだからです。就職の欄から年齢の付記を撤廃せよというのは、無茶です。

それから死亡記事の欄も享年が省けません。何歳で亡くなったのかを明示することは当人が到達した人生の数だからであり、付記は人物の紹介に大に関係あります。日英語を越えて普遍的に必要な付記です。

(6) メッセージの前触れについて総合的に展望します。最も大切なのは「要約」と「姓名」ですが、これらは日英語共に認められるので、問題ありません。「居住地名」も、日本がやや詳しいという点を除いて、共通していますが、一般に「所名」とメッセージは関係ないので、不要ではないでしょうか。その他、

「役職名」「所属機関名」（医師・大学生・会社員など）は日本語だけに認められますが、英語には存在しません。日本語の方が、論旨の方向づけとしてより有効でしょう。

ここで問題にしたいのは、その他の「弁別素性 (distinctive features)」です。「性別」「宗派」「学歴」「趣味」「年収」「健康」「主義」などが挙げられ、もしかしたら、これらのいずれかが、論旨の方向づけに大きく関わっているかもしれません。例えば、男性の見方であるということが、メッセージの内容を決定づけるとしたら、この前触れは「年齢」より付記することが重要になってきます。

したがって、私がここで主張したいのは、前触れの事項を限定的に設定するのではなく、もっと自由にする方が望ましいということです。論旨の内容と真に関連のある事項のみを前触れとして、「姓名」に付記するようにするのです。